

大会長挨拶

3月11日に発生したマグニチュード9の東日本大震災から、はや2ヶ月が過ぎました。当時、ここ仙台ではときおり雪も舞う冷え込みの厳しい日が続きましたが、季節は確実に移り変わり、春から初夏を迎えようとしています。

この度、日本顎口腔機能学会第46回学術大会を、みちのく仙台の地で開催させていただくに当たっては、井上富雄会長をはじめ皆様がたのご理解とご協力を頂きましたことに大会長として御礼申し上げます。また一方で、私どもの判断により、皆様に多大なご迷惑をおかけいたしましたこと、心からお詫びいたします。

震災後、東北大学歯学研究科は身元確認や巡回診療を精力的にこなし、また施設復旧も急ピッチで進めており、医局員一同、当初予定の4月23・24日での開催を行うべく心身ともに張り切って準備をいたしておりましたが、4月7日深夜の余震を受け、延期を決定いたしました。この余震は、宮城県沖を震源とするマグニチュード7.4で、仙台を中心に再び震度6強の揺れに襲われました。整理が進んでいた歯学部環境も3月11日の状態に戻ってしまい、順調に復旧していた東北新幹線の開通も遅れることとなり、また何よりも私どもの心が折れました。

しかしながら、そのようななかでも被災地みちのくにおいても桜が咲き、若芽が息吹いてきました。地震、津波は私どもにはどうしようもない自然界の事象ですが、一方で自然の営みは、いつもと変わらず逞しく時を刻んでいきます。人間の無力さ、無常を感じながらも、自然に勇気づけられ、この5月28・29日に延期開催することを諮らせていただいた次第です。開催にあたっての皆様のご厚情に改めて感謝申し申し上げます。

新幹線は復活しましたが、津波にのみ込まれた仙台空港は未だ臨時便のみの発着ですし、仙台の町中もまだまだ震災の傷跡の癒えない状況で、ご来仙いただく会員諸氏にはいろいろとご不自由をおかけすることとは思いますが、しかし今だからこそ、仙台でやろうと思わずにはいられません。私ども学術に携わるものが今やるべきこと、そしてできることは、やはり学術の進展に尽くすことしかありません。「研究第一主義」を理念の一つに掲げる東北大学の一員としては、なおのこと強く感じます。ここ東北大学で開催すること自体が、この災害からの復興に他なりません。震災により中止された学会等も多数ありますが、本学術大会は、震災後初めて仙台で開催される本格的な全国大会となります。何とぞご寛容のほど、宜しく願いいたします。

幸いにも、特別講演の川島隆太先生にもご理解を賜り、予定通り「咀嚼は脳トレになるか？」という演題名で貴重なご講演をいただけることとなっております。またシンポジウム「顎口腔機能を測る」も予定通りの演題で開催することができます。これらにより、顎口腔機能学の新展開を模索し、さらなる発展の端緒とすることができれば幸いに存じます。

最後になりますが、この度の震災に関しまして皆様がたからいただきましたご支援、お見舞いに感謝申し上げます。

平成23年5月

日本顎口腔機能学会 第46回学術大会
大会長 佐々木 啓一